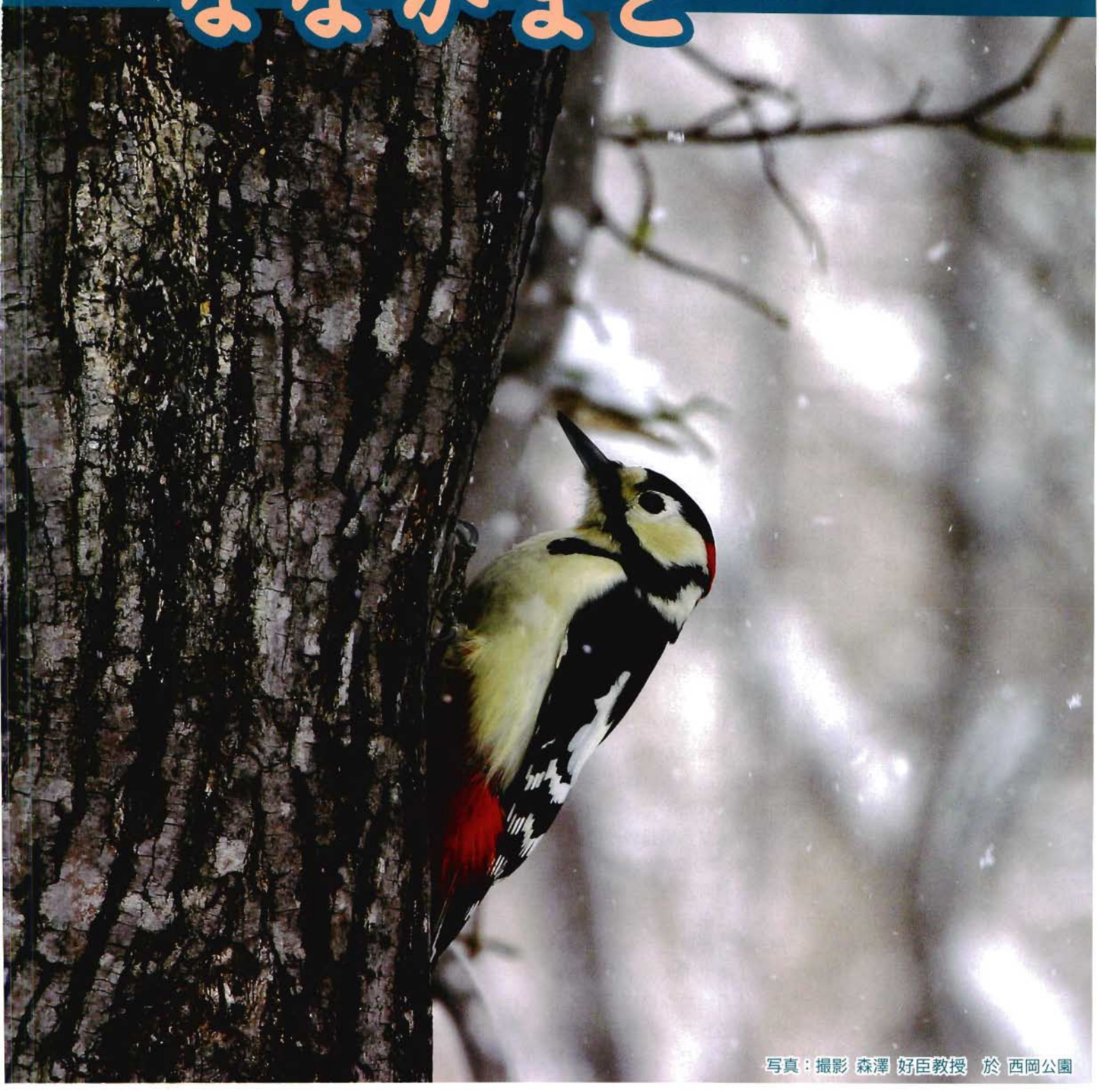
2006年11月15日発行
北海道情報大学 学内報

ななかまど Vol.38

発行：北海道情報大学
〒069-8585
江別市西野幌59-2
TEL 011-385-4411
FAX 011-384-0134



写真：撮影 森澤 好臣教授　於 西岡公園

目次

■蒼天祭を終えて 玉置学生部長 ……02
■新任教員あいさつ……03
■現代ＧＰフォーラム……04
■学生寮工事着工……05
■国際理解講座開催……06
■江別市雇用環境創出推進事業で講演会開催……07
■情報図書館に上原ゼミの作品集を寄贈……07
■南京大学日本文化研修旅行……08～09
■教員ＦＤの実施……10
■「ＩＴクラフトマンシップ」実施 ……10
■江別ものづくりフェスタに出展……11
■ふるさと江別塾実施……12
■中学生職場体験受け入れ……12
■オリジナルデザインパッケージラーメン完成…13
■平成18年度卒業記念小論集書式等について……13
■海外事情・アメリカ編／冒険精神……14
■海外事情・アメリカ編／初めての学生引率……15
■第18回 蒼天祭 ……16～18
■学生サポートセンターより……19
■ゼミ紹介……20
■クラブ紹介……21
■同窓生のページ……22
■ドイツ語検定試験３級合格体験記……23
■主要行事等……24

蒼天祭を終えて

学生部長　玉置　重俊

本学の第１８回蒼天祭は、大学祭実行委員会の学生諸君の献身的なご努力、および教職員の皆様の温かいご協力のおかげで、１０月７日(土)、８日(日)の両日において、立派に開催されました。ただ、今年の蒼天祭は、あいにく二日間とも良い天候には恵まれなかったので、多くのお客様を本学のキャンパスに迎え入れるという面では、かなりの困難が伴いました。それでも大学祭の実施内容としては、各種のイベントの準備と運営がよく整っていたせいか、かえって着実な成果も出たように感じられた。

７日の土曜日は、朝から雨まじりで風も強く、厳しい自然条件での大学祭初日を迎えることとなった。模擬店を経営し、多数の来客を期待した学生たちには、とても気の毒ではあったが、模擬店関係の学生たちは、風雨や寒さにも負けず、中庭のテントのなかで、焼鳥、焼きそば、たこ焼き、おでんなどを懸命に作っていた。また屋内では、飲み物や軽食を宣伝し、販売する学生たちの大きな声も響き渡っていた。悪天候にかかわらず、本学の学生や教職員とそのご家族あるいは地域の皆様が、積極的に見学に来てくれたので、屋内における各ゼミナールやクラブ及び教職員の各展示室は、それなりに賑わっていたような印象も受けた。

８日の日曜日も、残念ながら、前日同様の雨天となってしまったが、本学に来られた方々は、少なくはなかったようだ。実行委員長である栖原君の話では、二日間で、およそ二千人の来客があったらしい。また今年は、体育館のなかに、初めての企画として、蒼天神社も造られ、お賽銭箱やおみくじもきちんと用意されていた。因みに、お客様からのお賽銭は、すべて日本ユニセフ協会に寄付して、社会貢献もいささか実践するとのことであった。この日に、屋外の舞台で予定されていたよさこいソーランの演舞は、やむなく場所を体育館に移して、盛大に実施された。

このよさこいソーラン演舞は、四年前から実施しているが、地域の人々をたくさん呼び集めるイベントとして、蒼天祭には欠かすことのできないものになっている。本学の蒼天祭ために、わざわざ来て頂いた野幌若葉小、いずみの小、江別まっことえぇ、天下一品、北海道大学などの諸団体の皆様には、心から感謝を申し上げたい。本学のよさこいソーラン同好会の学生たちもチームを編成して、堂々と最高の演技を見せていた。とにかく参加なされた諸団体は、それぞれ持ち味を出して、素晴らしい踊りと元気な振りつけを熱演し、本学の大学祭をしっかりと盛り上げて下さった。

松尾記念館講堂で、午後四時から開催されたソーテンライブ・YUIのイベントも、実行委員の頑張りなのか、きわめて好評を博し、観客も多かったと聞いている。外からのプロのゲストを招いて開くこのようなライブは、当日の運営と管理の面でも、大変な苦労があるはずだが、学生諸君はよく協力して、イベントを大きな成功に導いたと思う。大学祭の結びには、たくさんの景品が当たるビンゴゲームの大抽選会が体育館で行われた。本学のこの大抽選会では、豪華な景品がもらえるという期待もあってか、本学の学生ばかりではなく、地元の小学生とそのご家族の方々も多数残って下さり、抽選のたびごとに、大きな歓声を上げていた。本学も地域の人々のために、大学祭などを活用して、今後も、このような取り組みやサービスを積み重ねていけば、必ず地域の人々に愛される大学として、堅実に発展していけるのではないだろうか。

最後になりますが、この蒼天祭の開催のために、本当に長い間、ご尽力とご奉仕を下さった実行委員会の学生諸君には、心から敬意と感謝を申しあげたい。企画や運営に全力で携わった学生諸君には、きっと生涯の思い出に残る充実感と達成感があったに違いない。また、二日間にわたり、色々とご協力とご支援を下さった本学の教職員の皆様にも、衷心より、厚くお礼申し上げます。できれば、来年の蒼天祭は、絶対に両日とも、日本晴れの良いお天気になって欲しいものである。

新任教員あいさつ

情報と医療の融合から未来を創る

医療情報学科 教授　西平　順

本年９月１日で医療情報学科に着任いたしました。これまで、北海道大学大学院医学研究科、北海道大学発ベンチャー企業「ジェネティックラボ」(札幌市)に所属し、主に遺伝子発現の解析と病気との関わりについて研究してまいりました。20年以上にわたり大学での医学教育と研究に従事し、最後の２年間にベンチャービジネスを経験しました。大学発ベンチャーはこれまでビジネス経験のない研究者の集団で構成されており、企業経営、ビジネスを目的とした研究開発などこれまでとは異なる“感覚”で仕事をしなければならず、チャレンジングな毎日でした。振り返ってみますと経済活動のダイナミズムを実体験するよい機会でしたし精神的にも大きなインパクトのある経験を得ることができました。今秋から北海道情報大学医療情報学科にお世話になることになりましたが、本学の環境も負けず劣らず新鮮なものです。本学は経営情報、メディアが教育、研究の核になっておりますが、今春から医療情報学科が立ち上がりました。新たな分野にチャレンジする教職員の意気込みを日々感じており、ベンチャー企業との共通点も多いのではないかと思います。

情報産業も医療も必ずしも全盛期の勢いのある分野ではありませんが、いずれの時代においても両分野は社会基盤として欠かせない領域であり、その教育と研究に関わることができますことを幸運だと思っております。本学は経営学、情報学ともに専門性が高く、多くのベテラン教員の方々が活躍されております。この分野に医学・医療分野をリンクさせた医療情報学はまだ歴史の浅い学問分野ではありますが、国家的な事業としての後押しもあり、今後さらに大きく発展する分野です。この医療情報学を学科として導入している大学は全国でもまだ10校にもみたず、このことを考えると、この早い時期に本学科を立ち上げたことは本学経営陣の英断であったと拝察します。これを可能にしたのは、本学が情報、経営を専門にした人材を揃え、堅実に教育・研究を実践した20年近い大学運営の実績が基盤になっているからでありましょう。このようなことから、情報・メディア系教員と医学・医療系教員との友好的な連携を基に国内・国外においてユニークな学科として大きく発展することを確信しております。医療を取り巻く環境は必ずしもバラ色ではありませんが、情報分野との融合から新たな医療革新が本学から生まれることを夢みております。

最後になりましたが、大学の大きな使命である学生教育については、少々欲張りではありますが、情報と医療について幅広く理解し実践できる人材の育成を目指しております。このことを実現するためには、学部・学科を超えた多くの教職員の連携が欠かせません。幸いにも、本学には衛星教育センターや宇宙技術開発に関わる先端的なグループ企業もあることから、教材の開発や医学研究の推進についてもその連携から他の大学では達成できない教育支援システムが形成されることでしょう。教育現場を活性化することにより、学生の就学意欲も高まります。本学で学んだ教養、専門知識を生かし卒業後も社会で活躍し、北海道情報大学のＯＢとして誇りをもてる大学組織の構築に貢献できればと考えております。このような理想を描いておりますが、一歩一歩実現できますよう努力をして参りたい所存であります。よろしくお願い申し上げます。

e-Learningが教育を変える

北海道情報大学〈現代GPフォーラム〉開催

平成18年９月29日(金)に本学松尾記念館講堂において、平成17年度に採択された現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代ＧＰ)の選定プロジェクト「ＩＴによるＩＴ人材育成フレームの構築―学習者適応型e-Learningシステムの開発―」における取組実施状況の中間報告を兼ねて、本学嘉数副学長の司会により「北海道情報大学　現代ＧＰフォーラム」が開催されました。

本フォーラムでは、「e-Learningが教育を変える」をテーマとし、本学経営情報学部　冨士隆　経営ネットワーク学科主任から本学の現代ＧＰの取組紹介、また、(独)メディア教育開発センター　清水康敬　理事長、北海道大学大学院情報科学研究科　宮永喜一　教授、青山学院大学総合研究所ｅラーニング人材育成研究センター　玉木欽也　副センター長、(株)スキルスタンダード研究所　高橋秀典　代表取締役から、国内外におけるe-Learning事情やe-Learningの課題・現状等について、講演・プレゼンテーションを行っていただきました。

本フォーラムを開催したことにより、本学の現代ＧＰの取組の活動内容や、これまでの成果等について、大学・高校関係者の方々、一般企業の方々、そして本学学生や教職員を含む計300名を超える参加者に対し情報を公開することができました。また、本フォーラムに出席いただいた方々からも、「e-Learningの様々な工夫が興味深かった」「国内外のe-Learningの現状や問題点などの内容がためになった」「あまり聞く機会のない講演内容であり、質の高いフォーラムだった」といった感想をいただくことができ、盛況のうちに無事終了することが出来ました。

(総務課)

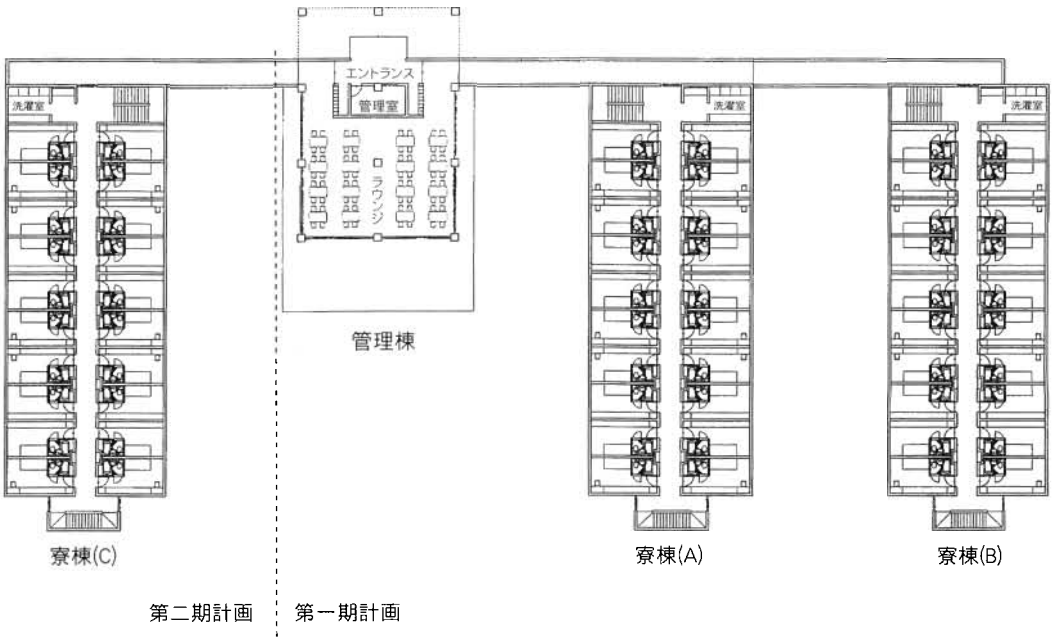
学生寮新築第一期工事に着工!!

8月30日(水)午前11時に学生寮の起工式が行なわれました。起工式では、工事の無事故を祈願した後、松尾泰理事長が鍬入れを行いました。

学生寮は二階建てで、今回は、第一期工事分としてエントランス、ラウンジ、管理室などと共に、バス・トイレを完備した男子学生の居室80室を完成させ、平成19年4月より新入生を受け入れる予定です。その後、第二期工事分として居室40室を追加する予定。

起工式で鍬入れをする松尾理事長

平面図(1階・2階)



「Museum of the Future : inventing tomorrow」
― 未来博物館：明日を創造する ―

Tony Stevenson先生講演会開催

平成18年10月26日(木)、オーストラリアからTony Stevenson先生をお招きして講演会を開催しました。タイトルは「Museum of the Future : inventing tomorrow」―未来博物館：明日を創造する―。Stevenson先生は、「未来学」という新しい学問分野の第一人者です。現在オーストラリアにある「未来博物館」の館長でもあり、ユネスコの評議員等多方面で活躍中です。今回、札幌市近郊に未来博物館を建設したいという希望があり、そのリサーチを含めて来道し、それを機に本学での講演が実現しました。

未来とは、ただ何となくやってくるものではなく、自分たちの選択の積み重ねの結果、必然的に決まるものである、という考え方が未来学の立場です。講演会では、これから生まれてくる世代への強い責任感と、今の時代を生きる人々の希望が語られていました。未来博物館で計画している展示物は、バーチャルリアリティなどの統合メディアを活用しながら、未来に向けての取るべき選択肢を考えることのできる場所となるとの説明があり、楽しい中にも有意義な講演会となりました。

（総務課）

国際理解シリーズ「時空の旅人」第1回 講演会開催

平成18年11月２日(木)、東北大学大学院　国際文化研究科教授　深澤百合子先生をお招きして、国際理解シリーズ「時空の旅人」第１回（札幌圏大学国際交流フォーラム共催）を開催しました。

深澤先生はイギリス・ケンブリッジ大学出身で、ケンブリッジ大学から博士号を授与されました。

今回は国際理解のための講演会ということで、最初に出身大学のケンブリッジ大学の様子をお話しいただきました。キャンパスの中をガウンを来て歩いている先生たち。そのガウンは学位や専門によって異なること。また教員の処遇の日本との違いについて実際に経験した方ならではの内容でした。後半は国際機関がいかに一般に公開されていて、私達はどのように関わって行くことができるかを中心にお話しいただきました。国際インターンシップの方法なども披露され、中にはとても熱心に聞き入る学生もいました。

次回は平成19年１月９日(火)14：00から一般の方を対象に札幌サテライトで実施の予定です。

（総務課）

江別市雇用創出推進事業 キャリアプランニング講演会開催

「半導体と大学のもの造り教育」

平成18年10月17日(火)、江別市雇用創出推進事業の一環として、キャリアプランニング講演会「半導体と大学のもの造り教育」が行われました。今回の事業は江別市の主催で行われ、講演会は本学と江別市内のもう1大学で実施されました。本学の講師は、株式会社オムニ研究所　代表取締役社長　吉見武夫氏と同技術顧問　水野修氏のお二人です。前半を吉見社長、後半を水野顧問が担当されました。

吉見社長からは、日本の産業構造やもの造りが日本の経済に及ぼす影響など、大きな視点からのお話でした。大学発ベンチャーの魅力と落とし穴についても語られ、起業することも視野に入れてみては、と学生へエールが送られました。続いて水野顧問からは、太古の昔から“たたら”で鉄を製造するなど、もの造りのDNAを持っている日本人という興味深い切り口でのお話でした。日本の産業基盤はものづくりであるという説明には説得力がありました。

当初、この講演が自分たちの進路や生活にどう関連するのかとまどいのあった学生達も、次第に話に引き込まれ、「どのような内容でも自分との接点があることが分かった」とアンケートに記入した学生もいたように、学生達にとっても視野を広げる良い機会となりました。　(総務課)

株式会社オムニ研究所
代表取締役社長　吉見武夫氏

オムニ研究所　技術顧問　水野修氏

江別市情報図書館に本学上原ゼミ作品集他を寄贈

平成18年8月、本学から江別市情報図書館へDVDを寄贈しました。寄贈したのは、本学上原ゼミ及び映像サークルの学生が作成した映像作品をまとめたものなどです。上原ゼミなどで造りためてきた作品で著作権をクリアしているもを1枚にまとめて寄贈しました。機会がありましたら、是非ご覧下さい。また同じものが本学図書館にもありますので、こちらでも視聴可能です。

中国南京大学からの日本文化研修旅行一行来学

学長表敬訪問

本学と南京大学との間の国際交流協定に基づき、学生の相互交流を実現するものとして、南京大学では全学対象の正規科目「日本文化実践講座」を設置しています。日本文化研修はその科目の総仕上げとして実施されるものです。今年で２回目となるこの講座には、引率教員4名及び科目を履修している学生16名計20名が2006年７月５日から７月14日までの間参加しました。

一行は５日に、中国上海から、アリオショッピングセンターそばのJR研修センターへ投宿しました。

翌日には本学で、井野学長の表敬訪問、キャンパスなどを見学した後、本学の学生がよさこい演舞を披露しました。日本青年の颯爽とした雄姿を中国からの研修生に見てもらうことができました。午後、江別市内の本学学生の自宅を訪問し、交流会として一緒に野外焼肉パーティで過ごしました。言葉は通じませんでしたが、お互いがコミュニケーションを取るために漢字を書いたり、英語で話したりして、皆一生懸命でした。　学生たちは和やかな雰囲気のもとで歓談し、相互理解と親睦を深めて、充実した一日でした。

理事長表敬訪問

３日目は小樽見学でした。小樽で撮られた映画「Love　Letter」は中国で人気のある作品です。小樽を訪ねた時は皆が「Love　Letter」の世界に浸ったようです。また、昼にはお寿司を体験しました。中国人は生ものを食べる習慣が無いので、期待と不安でいっぱいでしたが、皆美味しいそうに食べていました。

４日目には、北海道大学の総合博物館を見学し、

緑いっぱいのキャンパスを散歩しました。午後、北海道開拓記念館で、北海道文化についてのアイヌの歴史や文化を中心に、講習を受けました。アイヌは日本の少数民族と言われ、独自の歴史や文化を持っています。中国に56民族があって、それぞれの歴史や文化をもちろん持っていましたが、文化遺産としては日本のように大事に保護してこなかったことを理解したようです。終了後はバスで白金温泉方面へ移動しました。

５日目にはロープウェイで旭岳に登頂し、姿見の池付近をハイキングしました。ほとんど雪が降らない南京の人として７月の残雪を見て、人生初で大興奮のようでした。噴煙をあげている火山に一番印象を残したようです。午後、天人峡と羽衣の滝を見学して、皆は北海道の優れた大自然を一生忘れないと言っていました。

北海道開拓記念館で機織り体験

６日目には全国的に有名な旭山動物園の見学に向かいました。可愛い動物がたくさんいて、ペンギンは一番人気ものだそうです。とても可愛い動物のあとは、富良野のファーム富田に移動して、目を奪うばかりに艶やかなラベンダーと写真を撮りました。

７日目には、北海道から東京へ移動しました。数多くの学生があこがれる東京大学を訪れ、次に、日本における唯一の国立総合的な博物館、上野国立科学博物館を見学しました。

ファーム富田

８日目は、電子開発学園本部で松尾理事長への表敬訪問が行われました。参加学生は簡単な日本語で理事長へ挨拶しました。午後、皇居に行って見学し、その後、秋葉原で楽しく買い物をしました。夜には東京タワーで綺麗な夜景を満喫しました。

９日目には、日光江戸村と東照宮を見学に行きました。そして、翌日に成田から帰国し、無事10日間の日本文化研修旅行を終えました。

今回の日本文化研修旅行では、参加した学生のみならず、南京大学学長からも大変良い評価を得ることができました。情報大学との交流を模範として、色々な交流をスタートしたそうです。このような交流が末永く発展していくよう本学も努力します。　（総務課）

望岳台

「次世代IT人材育成を目的としたFDプログラムの開発」(教員FD)の実施

近頃、大学でＦＤといえば、フロッピィ・ディスクではなく、ファカルティ・ディベロップメント(Faculty Development)、すなわち教育の内容や授業方法改善のための組織的な取組みを指します。大学の教員の使命は、研究活動と教育活動、さらに最近は地域貢献が大きな柱となっていますが、その教育についても質が問われるようになってきました。特に本学のような実学系の大学では、大学の教育がいかに実際の産業界にマッチしているか、換言すると就職した学生がいかに戦力になりうるかは、大学の在り方を考える上で大きな検討項目となります。現在行われている大学の一般的なファカルティ・ディベロップメントは、学内研修会・講演会の実施や、学生の授業評価に基づく授業方法の見直しなどが中心となっていますが、教育の内容や質そのものを向上させようとするのが今回の本学の試みです。

本学は経済産業省・みずほ情報総合研株式会社の実施する「産学共同実践的ＩＴ教育訓練基盤強化事業」に応募し採択されました。この事業によって、本学教員が実際の企業へインターンシップ(現場体験)にでかけ、研修を行うこととなりました。６社の受け入れ企業へ本学から若手教員を中心に７名を派遣します。現場では現在何が行われているのか、どのような能力を必要としているのかなど、百聞は一見にしかず、教員は実際に現場で体験してきます。また企業担当者と一緒に、シラバス(授業計画)の作成、教材の開発、実際の授業の支援などを、産学連携で実施する予定です。現在すでにインターンシップは始まっていて、何名かの教員が研修を受けています。インターンシップを経験した教員の教育内容や質の向上が、学部や大学院全体の教育に影響を与え、これまで以上に質の高い授業を展開するようになることが期待されます。

この事業の補助金の対象期間は平成18年度内で終わりますが、本学ではこれを契機として、学内起業も視野にいれ、今後も教員のファカルティ・ディベロップメントを継続する体制を確立する予定です。

(総務課)

経済産業省委託事業「ITクラフトマンシップ」を実施

ポータルサイトクリエーターの育成を目指して、「ＩＴクラフトマンシップ事業　―ポータルクリエータ育成プログラム―」が平成18年11月に本学で実施されています。ポータルサイトとは、インターネットの出入り口のことで、一般には専門業者が用意したものを有料で使用しています。今回の事業はこれと同様なものを独自に作るための技術を習得しようとするもので、最終的に参加者が自分でポータルサイトを創作するところまで行う予定です。経済産業省の委託事業として実施され、主催は本学と、財団法人日本情報処理開発協会、経済産業省。高等学校の生徒を対象に本学教員がポータルサイトの構築技術を講義します。

参加生徒は江別・札幌近郊の高等学校を中心に男子７名、女子６名の計13名が集まりました。日程は11月の毎週土曜日で全４回。興味を持った高等学校の先生や大学生の参加もあり、毎回楽しく実習を行っています。一口にポータルサイトといってもその位置づけはさまざまで、コミュニティーをつくって意見交換を行ったり、情報発信の手段として利用したりと、いろいろな活用の方法が考えられます。参加者は自分の目指すポータルサイトの構築に向けて、試行錯誤を繰り返していました。

(総務課)

えべつものづくりフェスタ2006に出展

平成18年9月23日(土)に「えべつものづくりフェスタ2006」が開催されました。今年で7回目となるこのイベントも今ではすっかり市民に定着し、毎年2,000人ほどの人が来場します。会場は、江別市のほくでん総合研究所。今年は大変な好天に恵まれ、気持ちのいい秋の日差しの中、親子連れの声がにぎやかに響き渡っていました。

このイベントは、もともとほくでん総合研究所が行っていた施設の一般開放を、江別市の企業・大学・市などが協力し、市民が参加するイベントに発展させたものです。企業としては、ラーメンの株式会社菊水、カスケードガレージの株式会社日江金属、江別小麦で脚光を浴びている江別製粉株式会社、さらにはテレビの某料理番組でも紹介されたことのあるベーコンがおいしい有限会社トンデンファーム、また地元では有名なパン屋さんのMPベーカリーなど地元の企業が出展しました。市内の4大学はそれぞれが特徴を出し合って出展を競い、さらに、江別市にもちろん北海道電力株式会社などが参加し、今年も大変盛況でした。

今年の本学の出展内容は、「デジカメ写真でTシャツを作ろう」。毎年、デジタルカメラで顔写真を撮影し、何かにプリントして配るという出展内容で行ってきましたが、今年はそれをTシャツにプリントしました。顔写真をはめ込むフレームは毎年オリジナルで作成しています。今年はイルカに囲まれたデザインと、音符の中に顔を入れるかわいいデザインに人気が集まりました。また、今年のおもしろデザインは、モナリザの顔の部分に撮影した写真をはめ込むものや、雑誌の表紙を飾るようなものもあり、一部には大変うけていました。

顔写真の撮影とTシャツへのプリントで所要時間は10分程度です。気軽さも手伝ってか、今年も親子連れなど、多くの方におこしいただきました。

今年はお向かいで出展している札幌学院大学との相乗効果もあり、いっそう盛況でした。それでも、集客人数では今年も負けていなかったぞと、お向かいに勝手にライバル意識を燃やしつつ、また来年に向かって思いを新たにしました。

(総務課)

平成18年度ふるさと江別塾開催

平成18年10月７日(土)ふるさと江別塾が開催されました。ふるさと江別塾は江別市主催、江別市教育委員会と江別市内四大学の共同企画で毎年行われているもので、今年のテーマは「江別学をめざして　大学からの提案　～知ろう、創ろう、わがまち江別～」で行われました。

角井穆先生

今年は本学を皮切りに、酪農学園大学、札幌学院大学、浅井学園大学の順番で実施されました。今年の本学での開催日は、ちょうど蒼天祭(大学祭)にあたっていて、にぎやかなキャンパスの奥で、真剣な講義が行われました。

開講式の本学井野学長の挨拶に続いて、講義の一人目は、経営情報学部教授　角井穆先生の「江別の未来を創る」。江別市の立地や過去の経緯、現在示されている構想などから、地域開発にいかに市民が関わっていけるのか、またそこから考えられる江別の発展の可能性を探りました。二人目は、同学部助教授　鈴木健治先生の「スポーツを面白くする“空気”の科学」です。「空気抵抗」によってスポーツは行っても観戦しても面白いものになります。また、「酸素」にもスポットをあて、酸素を用いて私たちの身体がいかにエネルギーを得ているのか、また喫煙の影響などについて講義しました。

井野学長の挨拶

講義終了後は、大学祭の模擬店などに立ち寄られた受講者の方もいて、キャンパスをご覧いただくいい機会にもなりました。　(総務課)

鈴木健治先生

中学生職場体験

平成18年10月24日(火)から10月26日(木)の３日間、江別市立江陽中学校から４名(男子２名、女子２名)の生徒が本学で「職場体験」をしました。

この「職場体験」は、江別市教育委員会が以前より児童一人ひとりの勤労観、職業観を育てるための取り組みとして実施している「職業訪問」を一歩進めた対策として、同一事業所において職場体験することにより、働くことへの関心、意欲の高揚や自立意識の涵養を目指すため、昨年から実施されたものです。これは、近年、社会的にも話題となっているNEET*(ニート；教育、雇用、職業訓練のいずれもうけない、つかない)と呼ばれる若者が全国に64万人以上になるとも言われている現状から、職業観の醸成が必要とされているため実施していると伺っています。

４名の生徒は、今までにアルバイト等で働くという経験はなく、３日間を緊張した面持ちで、総務課、学生サポートセンター事務室、図書館、通信教育部事務部の４つの部署を日替わりで体験しました。

各部署での仕事内容は様々ですが、郵便物の仕分け、書架整理、データ入力等を体験しました。

(総務課)

＊ NEETとはNot in Employment, Education or Trainingの略

大学独自デザインパッケージのラーメン登場！

地元江別の小麦を使った本学オリジナルパッケージのラーメンが、平成18年９月に登場しました。小麦農家、製粉、製麺、食べることまでのすべてを地元江別でおこない、地産地消の地域ブランドづくりにも一役買っています。

江別市は優良な小麦の産地で、国産小麦にしては珍しく麺に適したグルテンの含有量の多い品質の小麦を生産します。今回のラーメンはこの地元生産者が作った100％江別産小麦を原料としました。その小麦を地元の製粉会社である江別製粉株式会社が小麦粉に加工。それを株式会社菊水（いずれも本社・江別）が麺として製造しています。今回の麺は、平成17年度産ハルユタカとホロシリという種類の小麦のブレンドで、熱を加えずに三日三晩、寒風で乾燥し、茹でると生めん状態になる同社の寒干し技術を使いました。寒干しラーメンは同社の他商品でも一般に販売されていて、味はお墨付き。賞味期限は常温５カ月間。また、スープは、コクの深い札幌ラーメンのテイストを生かした旨み醤油味と旨み味噌味の２タイプがセットされ、１箱２食入りです。パッケージデザインは学内で公募し、大島康彰先生の勢いのあるこのデザインが採用されました。

企業訪問や保護者懇談会などの手土産として使用していますが、11月30日から本学売店でも購入することができます。価格は400円です。機会がありましたら、是非ご賞味下さい。

（総務課）

《平成18年度卒業記念小論集書式等について》

1．提出期限

《経営情報学部》

・平成19年1月19日（金）

正午　指導教員に提出

《情報メディア学部》

・平成19年1月31日（水）

正午　指導教員に提出

2．書　式

① Ａ４版1,600字程度　１～２頁

② 連名の場合は、学籍番号順（番号が若い順）に名前を並べる。

③ 文字の大きさは右記、『フォントサイズ』を参考とする。

※タイトル

【フォントサイズ『20』】

※副タイトル ＋ 氏名

【フォントサイズ『16』】

※学科＋ゼミ名＋学籍番号＋その他

【フォントサイズ『11』】

④ フォントは「タイトル」および「副タイトル」はゴシック、「本文」は明朝とする。

3．頁は打たない。

書式例　１（1段）

↓（フォントサイズ20 センタリング）

図書館協力システムの構築について

→ドイツにおける図書館協力の現状

（フォントサイズ16 センタリング）

〈１行あける〉

（フォントサイズ11 右寄せ）→ △△学科　山田　太郎ゼミ

→ ９７００１２９

（フォントサイズ11 センタリング）

情報　花子←（フォントサイズ16 センタリング）

〈１行あける〉

近年の、図書館事情は、×××××××××、×××××××××。×××××××××　×××××××××、×××××××××。×××

書式例　２（2段）

↓（フォントサイズ20 センタリング）

図書分類の記号変換

〈１行あける〉

（フォントサイズ11 右寄せ）→ △△学科　山田　太郎ゼミ

→ ９７００１２９　９６００１２９

（フォントサイズ11 センタリング）

情報　花子　　佐藤　二郎

〈１行あける〉↑（フォントサイズ16 センタリング）

近年の、図書館事情は、×××　××××、×××××××××。×××××××××、×××××　××、×××××××××。×××

冒険精神

情報メディア学科 助教授　チャールズ マックラーティ

今年の夏私は、北海道情報大学の学生13人をアメリカの滞在地、カリフォルニア州サンタクルーズ市へ連れて行きました。私にとって２回目の引率の仕事でした。しかし、前回浪田先生と一緒に行った時と違って、今回は責任者が自分一人ということで、責任重大だなあと感じました。

ところが、心配は少しあったものの、参加した13人の学生が非常に協力的だったので、新千歳空港から目的地のUCSC(カリフォルニア大学サンタクルーズ校)まで、スムーズな旅ができました。もちろん浪田先生のサポートと情報大学の関係者全員の協力もあってこそ、うまくいったように思います。

UCSCに着いて、最初の一週間は大学の寮に泊まりました。その翌週から学生達はそれぞれのホームステイ先へ行き、私は街の中心部にあるUCSC Extension Centerのアパートへ移りました。寮にいる間、私も学生もUCSCの自然の良さを十分に感じていました。Campusを歩くと毎日鹿と山リスに会うことができました。いつでも野生動物に会える大学は、日本にもアメリカにもそれほど多くないように思います。

二週目から学生の日常生活は、英語の授業(午前中)、Free Time(午後の自由時間)とホームステイの家族と一緒過ごす時間(夜)でした。私が前に行った2002年度と違う点がありました。HIU-UCSCの語学研修と同じ時期に、いろいろな国の学生が来ていました。

韓国、台湾、ドイツ、スペイン、イタリア等からの学生がいました。情報大学の学生にとって、彼らと一緒に過ごした時間は大きな価値があったと思います。例えば、授業では一緒のクラスではない学生でも、午後の自由時間で同じチームでビーチバレー、野球、テニスをやりながら友達になるケースがありました。情報大学の学生と、韓国あるいは台湾の学生との間では、お互いに頑張って英語でCommunicationをとるしかなく、両方にとって為になったと思います。

学生にとって、ホームステイの家族との時間も貴重な経験となったに違いないでしょう。

日本語が通じないので、頑張って自分の意思を英語で伝える、それから相手の発言を英語でなんとか聞き取り、相手の気持ちを理解する。その努力はきっと、これからの人生には間違いなくPlusになるでしょう。私自身も昔日本でホームステイを経験したので、その大変さがよくわかります。相手は同じ人間なので言葉はなくても通じる部分はありますが、Communicationはやはり言葉(英語等)を勉強した方が、より正確なものになるわけです。日常生活の中で英語を勉強することが、上達への一番の近道だと思います。学生は毎日Communicationの必要に迫られてよく頑張ったように思います。これからも学んだ英語を忘れずに、頑張ってほしいと思います。

UCSCキャンパス・カレッジ8

（アメリカ編）」実施

初めての学生引率

総務課　河野　朝子

2006年度「海外事情(アメリカ編)」は、本学の通学・通信教育部の学生合わせて13名が、７月31日から９月１日までの約１ヶ月間、アメリカカリフォルニア州サンタクルーズで海外留学を経験してきました。期間中、学生達はカリフォルニア大学サンタクルーズ校(UCSC)エクステンションセンターで、世界各国の留学生たちと交流しながら英語を学び、また同時にアメリカ旅行も楽しむというスケジュールで、サンフランシスコ観光や、シリコンバレーで有名なサンノゼでＩＴ企業訪問、ヨセミテ国立公園へのキャンプ等を行いました。

スケジュール前半はマクラーティ助教授が学生の引率を担当し、後半は私が引率を担当しました。教員(英語担当)による学生引率が昨年で一巡したという経緯があり、今年、私が職員として学生引率を担当することになったわけですが、私はこれまで大勢の学生と接したことがあまりなかったため、始めは緊張のあまりいつも顔がこわばっていたと思います。そんな緊張をほぐしてくれたのは、10代から30代までという幅広い年代が集まったユニークな13名の学生と、UCSC側引率担当のアリソンとクリスティーナで、色々な場面でサポートをしてもらいました。

ヨセミテ国立公園・ヨセミテの滝

授業を終えると、学生達は集まって宿題をしたりショッピングに出かけたりと忙しく、また、他の国から来ている留学生と友達になり、仲良く遊ぶ姿もよく目にしました。楽しみながらまさに体当たりという感じで、異文化コミュニケーションを実践する学生達の積極的な姿勢は、引率者の自分だけではなくアメリカ側のスタッフをも驚かせるものでした。

サンフランシスコ・ジャイアンツのホームスタジアムでの野球観戦、インテルミュージアムの見学等、観光スポットも色々と訪れることができました。メインイベントは、２泊３日のヨセミテ国立公園へのキャンプ旅行で、５時間以上の車での移動と丸１日かけて山歩きをするというハードな旅行ではありましたが、一生忘れられないような美しく壮大でダイナミックな自然に出会うことができ、私も学生達も大感動でした。

今回の「海外事情」は、学生にとってだけではなく、私にとっても貴重な勉強の場であり、私はこの「初めての学生引率」を忘れることはないと思います。

最後に今回の引率でお世話になった、関係者の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

第18回 蒼天祭

●●実行委員長　栖原　良規

まず、第18回「蒼天祭」が事故もなく無事開催出来たことを報告いたします。また、「蒼天祭」の準備期間、ならびに当日には大学関係者をはじめ、様々な方々にご協力していただき、心よりお礼を申し上げます。

今年度の「蒼天祭」は両日とも雨と言う天候不順のなか、約2,000人と言う去年より多くのお客様にご来場いただき、楽しんで頂いたと思います。

私は、今回の蒼天祭では委員長と言う新たなポジションで臨んだ「蒼天祭」でした。今までの仕事とは全く違う、組織の統括、企画内容のチェック、学校との交渉、外部企業との交渉等、色々な経験をさせていただきました。何も経験の無い一からのスタートに色々な不備もありました。しかし、副委員長ならびに各部の部長の支えがあったからこそ、私が委員長としての仕事を全うできたのだと感じます。

そして、委員長という仕事を全うできたという自信と、実行委員会という活動を２年間行ってきた経験、そしてそこで得た仲間、人ととの繋がり、これらは間違いなく今後の自分に大きな後ろ盾となると思います。

すでに来年度に向けて実行委員会は動き出しています。これからも、実行委員会の活動にご理解とご協力を頂けますようよろしくお願いいたします。皆様、誠にありがとうございました。

●●企画部長　井上亜利紗

今年の目玉であった、ＹＵＩの「so-ten Live」。当日は雨にも関らず、私の想像を超えるほどの盛況でした。ライブの開催においてお世話になったAir-Gさんが配っていたカップ麺の焼きそばが大量にあったのですが、それが残りわずかとなるほどでした。

また、ステージ・蒼天神社などの企画にもたくさんの来場者が足を運んでくれました。このように蒼天祭が盛り上がったのも、企画部のみんなが頑張ってくれたおかげです。みんな本当にありがとう 。

●●出展部長　松原　隆政

今年の蒼天祭は、模擬店の数が昨年より多くなり、連日ともに雨にも関わらず、去年よりもにぎわいを見せていました。模擬店では、お好み焼きやたこ焼きなどお祭りでおなじみのものから、豚汁やカレーといったメニューまで色々なものが販売されていました。

展示のほうは、今年は多くのゼミやサークルが展示を行ないました。蒼天祭に来た人たちやオープンキャンパスに来た人たちに、日ごろ情報大学でやっている研究などを見せることが出来てとても良かったと思います。また、作品を募集して展示を行った、趣味の部屋やフォトコンテストも良かったと思います。

これからも、模擬店や展示を充実させて、蒼天祭を盛り上げていければと思います。

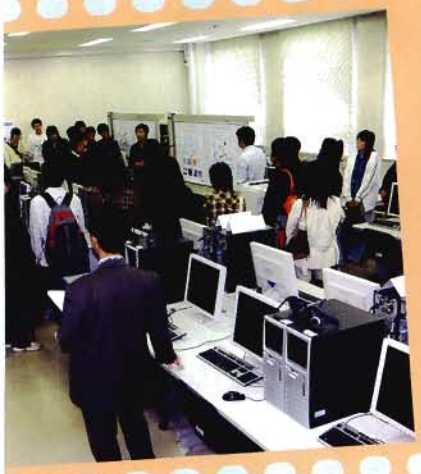
●●広報部長　飯田晃一

この度広報部長をやらせていただいて様々なことを学びました。仕事の進め方、他部署との連携、部員をまとめること、書類の作成など今までやったことが無いことばかりでした。今年の大学祭で私がちからを入れて行った仕事はちょうちんの設置と横断幕をかけることでした。ちょうちんや横断幕というと「そんなこともやってないの？」「普通やらない？」などと思われることでしょうが、この大学では行っていませんでした。だからこそ私はやりたかったのです。少しでも他大学の大学祭に近づけるように。

わたしは今年で広報部長の座を降りますが、次代の広報部長にわたしのこの一年間のノウハウ、改善すべき点などを伝えていき、よりよい大学祭になるように努力したいと思います。最後に、多大な迷惑をかけながらも支えてくれた仲間たちや教職員の皆様に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

2006年10月7日(土)・8日(日)

第18回 蒼天祭



学生サポートセンターより

平成18年度 保護者と教員との懇談会

平成18年度の保護者と教員との懇談会は、9月9日(土)3学年生の保護者を対象に、9月30日(土)1学年生の保護者を対象に本学会場において開催いたしました。

3学年生の保護者懇談会では、学長より本学の現状についてご報告申し上げ、立花就職部長より就職指導の基本的な考え方、本学の就職支援体制、就職指導スケジュール、求人動向、就職活動上の留意事項等就職に関しての詳細な説明がなされ、次いで個別懇談におきましては各学部・学科の教員と保護者との間で、学生の成績、学生生活、就職の状況について率直な話し合いがなされました。あわせて、学生サポートセンター事務室において、就職相談コーナーを活用して保護者の皆様に個別の相談等に応じました。

学長の挨拶

1学年生の保護者懇談会については、学長から大学教育についてのご報告に続き、加藤教養主任より1学年生の現状について説明がなされ、引続き木田教務課長より、成績表の見方・修得単位の目安・進級の条件等について説明がなされた。その後各クラス担任教員と保護者が個別に学生の修学状況、成績等について面談をいたしました。また、教務課においては、保護者に各学生の講義の出欠状況をご説明申し上げました。

1学年生の保護者の皆様および教員

保護者の皆様のご関心は、学生の学業と学生生活の現況、卒業後の進路・就職活動です。ご多忙に係わらず本学へお越しいただき、ご参加していただいたことを感謝いたします。

本学で学ぶ学生の学生生活が一層充実したものになるよう努めて参ります。今後とも、保護者の皆様にはご意見・要望をお寄せいただきたく、並びに本学に変わらぬご理解とご支援を下さいますようお願い申し上げます。

ゼミ紹介

福島ゼミ　担任　福島　吉春

福島ゼミは経営ネットワーク学科のゼミナールで、現在、大学院生２名、学部４年生６人、３年生６人の総勢１４人で構成されています。ただし平成１６年から始まったゼミで、平成１８年３月に初めての卒業生９人を送り出したばかりです。

研究テーマは管理会計論です。と言っても、内容がすぐには判ってもらえないかもしれません。実際、「経営ネットワーク学科にどうして会計学のゼミがあるのか」と聞かれて、すぐには答えられなかったことがあって、経営と会計とがすぐには結びつかないのが普通だと思いました。そういえば「情報大学にどうして会計学のゼミがあるのか」と聞かれても、やはりすぐに答えられそうにありません。

でも、企業を含む組織は、一般に人間が主体になって構成されていますから、人間どうしのコミュニケーション、つまり情報の流れが必要になります。

組織の場合、人の数も多いし、活動もいろいろですから、その財務的な記録と解釈を組織的におこなわなければなりません。その情報伝達の手段だったのが昔から簿記であり、会計だったのです。

なんだか講義の出だしみたいになってしまいました。所属しているゼミ生がそんなことを意識しているかどうかは判りませんが、とにかくみんな、この古くからある、やっかいな分野を理解しようとがんばっています。

中島ゼミ　担任　中島　潤

中島ゼミのテーマは、実システムの開発、情報セキュリティ、コンピュータネットワークの３本の柱。一人ひとりがWebアプリケーションやコンテンツなどを作り上げるが、モットーは卒業制作としてだけで終わらせるのではなく、後々そのシステムやコンテンツが活用されることを意識して制作すること。実際、過去に学生が制作した「学生ポータルサイト」や「履修科目登録システム」は現在も大学で運用されている。これまで世の中になかったような目新しいシステムを作るというより、確実に使える実用的なシステムをしっかり作ることを最重視している。ただ動けばいいというものであればある程度の知識さえあれば誰でも作ることができるが、さらにその上を目指して、バグが少なく、使いやすく、メンテナンスも楽にできる品質のよいシステムを作ることを目指して欲しいと願っている。現実には、ゼミに配属されてくる大半は情報メディア学科の中でも、どちらかというと何も出来ないか勉学意欲に欠ける方の学生で、自分は何も出来ないと信じ込んでいる学生が多い。それでも、今までのゼミ生の全てが卒業までの２年間で、なぜか少なくとも人並み程度のことはできるようになる。毎年彼らの成長には驚かされている。

情報メディア学科にはデザイン系の仕事に就きたいと考えている学生が多くいるが、入社してすぐにデザインの実務を任されることはまずありえない。となると、デザインだけができる人材より、デザインを含めて幅広い技術をもっている人材の方が企業にとっても魅力的ということになる。だからこそ、システム構築や情報セキュリティなども学んで自分の技術に付加価値を付けておくべきと強く言い聞かせている。

クラブ紹介

株式研究同好会

部長　千葉　祐明

今年の春にできた新しいクラブ「株式研究同好会」です。普段は新聞を読んだり本を読んだりしています。蒼天祭の時は経済に関する展示をしました。現在は日経ストックリーグの締め切りが近いので、ポートフォリオ作成や提出するレポートを作成しています。

できたばかりの頃はいったい何をやったらいいのか解らず、途方に暮れていましたが、なんとか活動目標を見つけられて、それに向かって頑張っています。

「株式研究同好会」というだけあってやはり経済を中心に勉強しています。経済学がわかっていれば、新聞が読みやすくなります。どうして今、金利が上がっているんだろう？　円高ドル安ってなに？ バブルってなに？ などなど解ると楽しいです。玉山先生の経済学とコーポレートファイナンスを受講して、経済新聞を読んで、経済指標を押さえているあなたはもう経済マスターです。

来年１月にストックリーグのレポートを出し終えたら、次はスーパーカブロボコンテストに出場します。JAVAでプログラムを作り、株を自動で売ったり買ったりするカブロボ君を作ります。JAVAできなくても全然OK。一緒に覚えましょう。

【求む新入部員！】

経済に興味がある人、株をやってみたい人、就職に強そうだからやってみようと思っている人、大学に入ったけど他にやることが無い人、インテリになりたい人、友達がいない人、ホームページが作れる人、JAVAをやってみたい人、さあ勇気を出して新たな道に進みましょう。

・活動場所：部室棟２Ｆ一番奥「予備室」
・活動時間：昼休み、放課後
・メール：kabuken2@mail.goo.ne.jp

バドミントン部

部長　田中　秀昌

私たちバドミントン部は男子14名で構成されています。練習は午後４時から６時半まで土日を含めると週６日、体育館で活動しています。

北海道で開催される大学生対象のバドミントン大会は年に４大会開催、１、２年生が出場する新人戦を含めると５大会と、大会数も充実しています。

中でも一番大きな大会である、北海道学生バドミントン会長杯争奪選手権大会(11/7～11/11旭川市)に出場してきましたので、その結果を報告します。

会長杯はトーナメント式で行なわれ、ＡブロックとＢブロックに分かれて行なわれます。Ａブロックには１部や２部などの強い選手たちが100名ほど出場し、Ｂブロックにはそれ以外、１部、２部の選手も出場可能ですがＡブロックに比べると技術的に劣ると思われる選手200名ほど出場します。Ａブロック、Ｂブロックのいずれかに出場するかは条件があり、他の大会で好成績を残していれば必然的にＡブロックに出場しなければならないということになっています。

今回の我が部はＡブロックに２名、Ｂブロックに８名が出場しました。成績はＢブロックのシングルスにおいて、見事優勝を果たし、その他にもベスト16入り、ベスト32入りを果たしました。

ダブルスでも、Ａブロックでベスト32入りし、Ｂブロックではベスト16入りを果たしました。

会長杯が終わり３、４年生は年内の大会が終わりましたが、１、２年生は12月に新人戦があるため、今も大会に向けて練習を重ねて、好成績を残せるよう準備を整えています。

これからも全ての大会に積極的に出場し、結果を出していきますので、女子学生のいない暑苦しい部活でありますが、応援よろしくお願いします。

同窓会と教員の意見交換会開催

小雨の入り混じる中、平成18年10月７日北海道情報大学と同窓会で意見交換会を行いました。開学してから18年目にして初めての試みとなるもので、大学と同窓会が各々の現状や方向性について共通認識を深め、今後の活動方針への参考とするために開催いたしました。

意見交換会には、同窓会から札幌地区本部役員７名、東京地区から支部役員２名が参加し、大学からは井野学長や嘉数副学長をはじめ23名の教職員が参加され、総勢30名の出席のもと行われました。

意見交換会では、まず同窓会の事業内容について、基本柱である３点について説明を行いました。

・卒業生のコミュニティ（情報交換）の提供
・大学の諸活動への支援
・在学生への支援

具体的な活動としては、同窓会総会およびその後に実施の懇親会や大学祭である「葵天祭」への支援、大学１年生に対するキャリアガイダンスなど行っています。その中で、大学から同窓会へのご質問・ご提案もいただきました。

・「同窓会内部でのアクティビティ（活動内容）は？」
・「同窓会内部の横の連携はとれているのか？」
・「イベント等の参加は活発か？」
・「同窓生の内、社会において組織のトップに立っている割合は？」
・「同窓生の現状についての基礎データは、項目や更新度を含め、どの程度把握しているのか？」
・「同窓生のデータ集約により、大学運営に良い影響を与えていくことが可能になる」
・「活動の幅を広げるために現状を把握（必要なデータを整える等）し、議論していくことが有効である」

これらの大学の要望に応えるためにも、同窓生の基礎データを整備することはもちろん、在校生が卒業後も同窓生との連絡が取れるよう、在学中におけるゼミ単位での連携の強化や在学生と直接的にコミュニケーションを深められる場を多く設けるなどの活動も行っていきます。

また意見交換会の２つめの目的として、平成16年度大学発行の自己点検評価報告に対しての意見交換を行いました。その中で、同窓会に対する評価および要望を頂きました。

・在学生への支援としてキャリアガイダンスの講演会協力のみならず、在学生の就職支援等をこれまで以上にお願いしたい。
・在学生に向けた内容を充実させるうえで、東京で活躍する同窓生の近況について更なる情報提供をお願いしたい。
・卒業生やその家族を含め、HIU行事等への積極的な参加を求めたい。

これらと同時に大学が現在直面している、また取り組んでいる課題についても共通認識を持つことができました。特に中心となったのは少子化問題に関わる内容でした。

・入学希望学生の減少
・新学科である医療情報学科のこれからについて
・学生満足度の問題
・インターンシップの問題

同窓会としても、これらの問題について、同窓会活動を通して、協力していきたいと考えています。

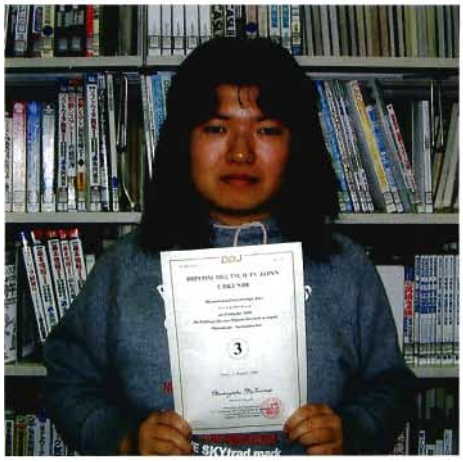
紙面の都合上、本文では意見交換会で取り上げられた話題の一部のみ掲載となりましたが、初めての試みということで、どのように意見交換会が進展していくかという若干の不安はありました。しかしながら、良い雰囲気の中、大学及び同窓会の各々の観点での問題提起や共通認識を持つことができ、非常に意義のある意見交換会でありました。

今回は「蒼天祭」が開催されている中での意見交換会でしたが、今後も定期的に実施し、同窓会と大学と意思疎通を図り、より良い同窓会活動を行っていきたいと思います。

諸先生へ

まだまだ未熟な同窓会ではありますが、本学を盛り上げて行く熱い気持ちは持っていると自負しております。今後とも、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

北海道情報大学同窓会　一同



独検3級合格体験記

システム情報学科３年　関ゼミ　　菅原　香苗

私は、今年の６月に独検３級を受け、合格しました。ここでは、私がドイツ語に出会ってから、独検３級に合格するまでの軌跡を書いてみたいと思います。

私がドイツ語をやってみたいと思ったのは１年生の秋頃でした。そのきっかけも思わぬものでした。ある日、シラバスを読んでいると、特別講義「ドイツ語特別コース」というのが目に留まりました。「何か変わった資格を取ってみたい」と思っていた私は決心しました。「よし、２年生になったらこのクラスに絶対入る！」と。「でも、そのためには今やっているロシア語をちゃんと合格してから」と考えました。

２年生になり、希望通りに私は「ドイツ語特別コース」へ入りました。入ることはできても、周りは全員１年生の時にドイツ語を選択した人たちだったので、その人たちと同じように講義についていけるのか、途中で挫折してしまうのではないかと不安でした。

実際にやってみると、文法も単語の意味も何も分からず、「ドイツ語って難しい」と感じました。しかし「まずは講義についていけるようになりたい」、「みんなに早く追いつきたい」という思いで、講義で使っている独検４級問題集以外にも、テレビやラジオ講座、梅津先生から頂いたテキストで勉強しました。講義のテキストはできるだけ予習して、単語の意味や発音を確認しておきました。先生から頂いたテキストの問題は、辞書や前のページの本文を参考にしたりしながら解きました。そして次の週に先生に持っていって添削やアドバイスをお願いしました。

最初の頃は動詞の人称変化や名詞の格に戸惑いました。問題を解いていて「この単語はどう発音するのだろう？」ということもよくありました。しかし疑問を持ち、それを辞書で調べることが楽しくて仕方がなかったのです。勉強していくうちにロシア語とは違った面白さを感じるようになりました。ドイツ語は英語とよく似た単語や発音の仕方が多いからです。そこで私は６月頃には11月の独検に挑戦しようと決めていました。

夏休みは４級の問題集を中心に、テレビやラジオ講座も活用しました。この頃になると、独検４級の範囲外の分野が多く出てきましたが、耳を慣らすために続けました。４級の問題集を終えてからは、梅津先生に新しいテキストをもらい、休み明けからそのテキストの問題をやり、自分で解答を見て答え合わせをしました。それから本番までは４級の問題集の見直しが中心でした。

こうして時間はあっという間に過ぎ、11月の本番を迎えました。試験会場は北大で、前に４級を受けた人から「リスニングのスピードが速い」と聞いていましたが、思っていたほどでもなく、あまり緊張もしませんでした。

そして１カ月後、４級の合格通知が届いたときは、「嬉しい」の一言でした。このときは、まだ３級にチャレンジしようとは思っていませんでしたが、３ヵ月後、学校の勉強が一段落したところで、３級へ挑戦することを決めました。４級だけでは物足りなく、もっと上を目指してみたいと思ったからです。

さっそく勉強に取りかかりました。４級を受けるときに先生からもらった問題集で、残していた３級の範囲と、３級の検定用の問題集、そして新たにもらった問題集の中の３級の範囲、あとはラジオ講座を聞いていました。問題集は学校の講義の合間に少しずつやりました。３級の範囲でなかなか覚えられなかったのは「熟語」と「形容詞」でした。「前置詞」が特に苦手だった私にとって、「熟語」を覚えるのは至難の技でした。このときは、本番が近づくにつれて「受かるのだろうか？」と不安になってきましたが、とにかく問題集の３級の範囲はすべて終わらせようと本番の前日まで勉強を続けました。

そして迎えた独検３級の本番。試験会場は小樽商大の中にあるパソコン室のような場所でした。リスニングのスピードは４級と比べものにならないほど速く、さすがにこのときは試験の出来に自信を持てませんでした。「多分ダメだろう」と思っていたので、合格通知を受け取ったときは自分の目を疑ったくらいです。

そして今、この原稿を書きながら思います。自分に続く人が出てきてほしい、独検に限らず、何かにチャレンジして、一人でも多くその願いが叶うようになってほしいと思います。

P.S

最後に、私が所属する「関ゼミ」は、女子が私だけでちょっと寂しいです。恐らく数学が出来る人の集まりということで、女子から敬遠されているのだと思います。「関ゼミ」には数学が出来る人ばかりでなく、私のような変り種もいますので、来年以降、女子がもっと「関ゼミ」に入ってくれるよう、期待しています。

◆◆教職員の動向◆◆

《教員》

(採　用)　9月1日付
　教授　　西平　順　(医療情報学科)

《職員》

(退　職)　7月31日付
　図書館事務室　　寺尾　奈七子
(配置換)　8月1日付
　図書館事務室　　中村　正志(教務課)
(配置換)　9月1日付
　教務課　　武田　美由紀(図書館事務室)

◆◆7月～11月15日主要行事◆◆

◇法人本部◇

8月30日(水)　学生寮建築起工式
9月 6日(水)～8日(金)　監査法人トーマツ「平成18年度中期監査」
10月12日(木)　理事会
　17日(火)　日本私立学校振興・共済事業団「融資対象事業実施状況等調査」
11月14日(火)　札幌東税務署「収益事業調査」

◇大　学◇

7月 5日(水)～14日(金)　南京大学日本文化研修旅行
　14日(金)　経営情報学部教授会
　21日(金)　情報メディア学部教授会
　23日(日)　ＡＯ入学試験 第一次面談(本学、函館、東京)
　24日(月)　ＡＯ入学試験 第一次面談(北見、釧路)
　25日(火)　ＡＯ入学試験 第一次面談(旭川、帯広)
　25日(火)～8月2日(水)前期定期試験
　28日(金)　全学教授会
　29日(土)～30日(日)　公開講座「コンピュータで暑中見舞いを作ろう」
8月 3日(木)～9月18日(月)　夏期休業
　21日(月)～25日(金)　公開講座「ゆっくりのんびりWordに挑戦」
9月 5日(火)　公開講座「Photoshopの選択範囲作成法」
　8日(金)　経営情報学部教授会
　9日(土)　保護者と教員との懇談会(3年生保護者対象)
　15日(金)　情報メディア学部教授会
　　公開講座　東京フォーラム「景気サイクル・資源・知財　三つのキーワードで探る、日本経済と金融資本市場の展望」
　17日(日)～18日(月)　ＡＯ入学試験 第1次面談
　19日(火)　後期開講
　22日(金)　全学教授会
　29日(金)　現代ＧＰフォーラム
　30日(土)　保護者と教員との懇談会(1年生保護者対象)
10月 2日(月)　前期末卒業 学位記授与
　7日(土)～8日(日)　蒼天祭
　7日(土)　同窓会役員との懇談会
　　ふるさと江別塾
　11日(水)～21日(土)　公開講座「プログラミング入門－Java－」(全4回)
　13日(金)　経営情報学部教授会
　14日(土)　情報メディア学部3年次編入学試験
　17日(火)　江別市主催キャリアプランニング講演会
　20日(金)　情報メディア学部教授会
　22日(日)　ＡＯ入学試験 第2次面談
　24日(火)～26日(木)　中学生職場体験受入れ(江別江陽中学校、江別第二中学校)
　26日(木)　公開講座　Tony Stevenson氏講演会
　27日(金)　全学教授会
11月 2日(木)　公開講座「国際理解シリーズ(1回目)
　　『時空の旅人』－タウン＆ガウン－」
　10日(金)　経営情報学部教授会
　14日(火)　公開講座「食と健康－油断大敵！内蔵肥満－」
　15日(水)　公開講座「Motion(グラフィックソフト)デモ」

◇大学院◇

9月16日(土)　大学院入試(1次募集)
　29日(金)　研究科委員会

◇通信教育部◇

7月24日(月)　新潟教育センター大学見学
9月23日(土)　本学入学説明会
10月23日(月)　特別講義(ファイナンス)第1回
　　(東京eDCビルにて12月11日(月)までの毎月曜日全8回開講)

◆◆広報活動◆◆

＜北海道情報大学通信教育部　入学説明会:本学独自＞
7月:　5会場(福岡、東京、名古屋、大阪、札幌)
8月:　1会場(新潟)
9月:　2会場(東京、本学)

＜北海道情報大学通信教育部　合同入学説明会:私大通教主催＞
8月:　3会場(大阪、名古屋、札幌)
9月:　2会場(東京、福岡)

＜進学相談会＞
7月:東京都　1会場(錦糸町)
8月:北海道　6会場(函館、札幌、旭川、北見、釧路、帯広)
9月:北海道　4会場(小樽、室蘭、苫小牧、札幌)
　岩手県　1会場(盛岡)
　秋田県　1会場(秋田)
　青森県　2会場(青森、八戸)
　東京都　1会場(新宿)
11月:北海道　7会場(小樽、滝川、留寿都、旭川、北見、岩見沢、釧路)

＜高校内ガイダンス＞
7月:北海道　5校(北海高校、旭川大学高校、北海学園札幌高校、札幌拓北高校、美唄高校)
　神奈川県　1校(東海大学菅生高校)
8月:北海道　1校(札幌真栄高校)
9月:北海道　3校(帯広三条高校、旭川凌雲高校、札幌丘珠高校)
　千葉県　1校(敬愛学園高校)
10月:北海道　1校(北海道栄高校)
11月:北海道　7校(旭川南高校、登別青嶺高校、旭川明成高校、札幌篠路高校、富良野高校、江別高校、小樽桜陽高校)

＜高校出張授業＞
9月:北海道　1校(石狩翔陽高校)
10月:栃木県　1校(作新学院高校)

＜高校訪問＞
7月:北海道277校、東京都12校、埼玉県11校、千葉県2校、神奈川県4校
8月:北海道14校、東京都1校、神奈川県1校
9月:北海道204校、東京都9校、埼玉県6校、千葉県2校、神奈川県7校、栃木県1校、群馬県1校
10月:北海道140校、東京都9校、埼玉県9校、千葉県2校、神奈川県1校、茨城県1校
11月:北海道27校

＜ＡＯ入試・奨学金説明会＞
8月 4日(金)　本学

＜オープンキャンパス＞
7月29日(土)　本学
　30日(日)　本学
8月 2日(水)　旭川、北見、釧路、帯広、函館
9月 3日(日)　本学
10月 8日(日)　本学
11月 5日(日)　本学

＜広報室来学者＞
7月31日(月)　稚内大谷高校(大学見学会:学生1名)
8月 4日(金)　北星学園大学附属高校(学校見学:学生1名)
8月26日(土)　北星学園大学附属高校(学校見学:学生2名)
9月28日(木)　白樺学園高校(教員2名)
9月29日(金)　野幌高校(学校見学会:学生27名、教員2名)
10月11日(水)　江別高校(大学見学会:学生354名、教員12名)
10月24日(火)　江別第二中学校(総合学習:学生2名)
11月10日(金)　清里高校(大学見学会:学生2名)
11月15日(水)　楊志館高校(衛星体験学習:学生317名)

◆◆　主な来学者　◆◆

7月 6日(木)　南京大学日本文化研修旅行一行
8月 2日(水)　岡山県議会総務委員会視察団
10月24日(火)　タイ Rajamangala University of Technology Thanyaburi 一行

編集後記

今年で2回目となった南京大学生の日本文化研修旅行は、7月5日から14日までの10日間、16名の学生と4名の引率教員4名が、札幌、白金温泉、東京にそれぞれ3泊して行われた。この間、理事長・学長への表敬、文化財の見学、博物館などでの体験学習、本学学生との交流、観光等ハードな日程をこなし、日本の様々な異文化に触れて帰っていった。帰国の際、書いてもらったアンケートには買い物をする時間がもっとほしかったというものが何件かあった。ちなみに学生が持ってきたお金は5万円以上が半数以上で，中には10万円以上も2人おり、秋葉原の電気街では買い物に夢中で集合時間に間に合わなかった者もいた。大学教授の基本月給が3万円位と言われている中国でこの額をどう見たらいいのかと思った。(風)